



写真1：幼児の様子

●得られた成果及び評価

- 知育アプリ一覧表（2015年度版）を整理することができた。
 - ・合計500個程度のアプリを調査し、一覧表に総数273個を整理した。ただし、認知的な課題が含まれるアプリであってもN-Cプログラムの項目には該当しないものが多かった。同一のアプリであっても、複数の認知、言語面の課題に使用できるものは、記載した全ての数を総数に含めた。
 - ・子どもと一緒にアプリを使用する大人が意図をもつことで、1つのアプリでも様々な活用方法が考えられた。
- 個別指導の時間に知育アプリを活用できた。そして、発達記録チャートの記録により、幼児がクリアできる項目が少しずつ増え、認知・言語面での変容は明らかであった。
- ※ただし、他の指導も同時進行で行っているためそれが知育アプリに依るかどうかは断定できず、他の指導の効果も大きいと考えられる。

●残された課題とその解決への展望

- 知育アプリ一覧表の作成について
 - ・日々新しいアプリが誕生する中で、全ての知育アプリについて調査は難しく、アプリのバージョンアップによる内容の変更に対応することは困難であった。
 - ・N-Cプログラムでは、該当するアプリがない項目が多かった。また、聴覚に関する項目が、「聴覚記録」しかないため、聴覚の活用等に関する段階的な表が別途必要であると考えられる。
- 個別指導を中心にした、知育アプリの活用について
 - ・個別指導の際の知育アプリの活用について、その他のアナログ教材による指導と比較すると柔軟な指導が行いにくくなるが多かった。幼児の実態によってカスタマイズできるアプリがあればより効果的に活用できると考えられる。また、アプリはあくまで保育者が指導する際の教材にすぎず、アプリを幼児が一人で使用することで能力が伸びるものではなかった。能力の伸長にはアプリを介した、幼児に対する保育者の意図的な関わりが必須であった。
 - ・N-Cプログラムの発達記録チャートの次なる課題と、その他のインフォーマルな実態把握による課題とでは、その他のインフォーマルな実態把握による課題の方がよりスモールステップであるため、個別指導にアプリを生かすには、完成した知育アプリ一覧表よりも更に細分化された一覧表が必要である。

（執筆：藤井裕士）

<連絡先>

岡山県立岡山聾学校